

040 コウノトリ目サギ科 ムラサキサギ



L-79Cm

サギの仲間でもっとも美しい色合いをしています。2006年11月に十三干潟に出現、多くの野鳥ファンを釘付けにしました。アオサギよりも一回り小さく、鳴き声はギーーとかグアアアーとのことですが、淀川に現れたときには鳴き声を聞いていません。沖縄南部の石垣島や竹富島などで少数が繁殖しているだけで、近畿地方では、迷い込んだ記録だけですが、この時には24日間十三に滞在しました。

041 コウノトリ目サギ科 サンカノゴイ



L-76Cm

ビルの谷間を背景にふわり浮かび上がった、サンカノゴイ。葦にまぎれると遠目では観察出来ません。まるで葦原の忍者。パワーと鳴くそうですが声を聞いていません。ムラサキサギを観察中に偶然に、撮影できたからです。その後は柴島再生干潟の葦の島で何度か飛び上がるのを観察しています。

042 コウノトリ目サギ科 ダイサギ



L-90Cm

日本の白鷺で最大。90Cmですが92Cmのアオサギより大きなオオダイサギも冬に飛来していると言う研究者もいますが、はっきりとは認定されていないと言う意見もあります。

夏にはくちばしが黒く、喉とくちばしの間に青い部分があり、目印になっています。また背中から長い飾り羽根が伸びて汚れていなければ美しい。

サギ類は首を折り曲げて飛びます



043 コウノトリ目サギ科 チュウサギ



L-68Cm

とっても稀な白鷺。夏鳥と言われていますが冬1月に柴島再生干潟で観察されたこともあります。この映像は柴島再生干潟で、4月末に撮影しました。短めで太い黄色なくちばし、背の裏のような飾り羽根が風にそよいでいます。シャッターを切るときにワクワクしたことが思い出されます。

044 コウノトリ目サギ科 アマサギ



L-50Cm

3月の半ばから早朝に5羽、4羽と幾つもの群が、淀川上流を目指し飛翔しています。始めは純白の羽色でしたが、4月半ばには亜麻色の部分が頭から胸にかけて現れてきます。そして4月下旬、30羽を越える群で淀川上流に向かいました。この年の移動の最終便だったようでその後は観察できませんでした。50Cmと白鷺類最小。魚よりイナゴやバッタ、土中から這い出したケラなど昆虫を好んで食べます。

045 コウノトリ目サギ科 コサギ



L-61 Cm

年間を通し観察できます。春になると頭から二本の長い飾り羽が伸びて、背中にも飾り羽が伸びてボリュームを増します。白鷺の仲間では最も積極的に動いて餌を捕ります。片足を震わせ魚を追い出し、素早くつかみ取ったりもします。くちばしは年中黒く、黒い脚に足指が黄色。



羽繕い

046 コウノトリ目サギ科 カラシラサギ

写真応募中

2007年に海老江再生干潟で観察されています。行動はコサギによく似ていますが、くちばしの黄橙色なことと飾り羽が派手なことが、コサギとの相違点です。飾り羽が落ちるとコサギとの区別がつきにくくなります。

047 コウノトリ目サギ科 アカガシラサギ



L-45Cm

2008年10月19日 河川レンジャー観察会で観察されました。当日は淀川河川敷フェスティバルが開催されるので、観察会を時間を早めて開催しました。夕方までに3回飛翔したそうです。撮影中は白い鳥に見えていたのですが現像してみると赤褐色が出ていました。2004年に園田地区の池に飛来した記録がありました。淀川では初観察です。大きな黄色い脚と白い腹と翼はとても印象に残っています。

048 コウノトリ目サギ科 ササゴイ



L-52Cm

主に昼間に活動する夏鳥。眼は黄色。5月から8月にかけて干潟に出没し、狙いを定めて飛び掛りながら首を伸ばし獲物を突き刺すように捕らえます。集団営巣地の樹木の周りには魚、カエル、エビなどが落ちています。幼鳥は親よりも黒っぽく見えます。

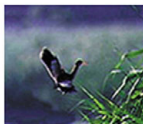
049 コウノトリ目サギ科 ゴイサギ



L-570cm

主に夜に活動します。
早朝なら観察は容易いと思います。
但し、淀川河川敷では姿を見かけることは
あまりありません。
4月頃から眼が赤くなります。
夏鳥と思っていましたが、冬に
十三干潟で観察されたことがあります。
幼鳥は褐色で、翼や背に白い斑点があり
ホシゴイと呼ばれています。

050 コウノトリ目サギ科 ヨシゴイ



L-39Cm

夏葦の繁みに巣をかけて子育てをします。
37Cmとサギ類で最小です。
警戒心が強く、人前に姿を見せません。
葦にとまっけていてもなかなか姿を確認できません。
まさに葦原の忍者です。
飛来してきたところからじっくりと観察しましょう。

051 コウノトリ目トキ科 クロツラヘラサギ



L-740cm

2006年12月1日 十三干潟にムラ
サキサギ観察中に飛来してきた世界的
に貴重なトキの仲間。
白黒写真では眼の位置が分かりにく
いのですが、赤い眼をしているので
顔の輪郭が確認できました。
ヘラ型のくちばしを水の中で左右に
振りながら前進して魚を捕らえてい
ました。
2007年5月にも柴島再生干潟に現
れています。

052 ツル目クイナ科 クイナ



L-29Cm

東北地方以北で繁殖。淀川では冬鳥。単独で行動し、よく繁った草むらや葦原が生息地。日と目に付きにくい場所でその上警戒心が強いいため観察のチャンスがほとんどありません。赤いくちばし、暗い橙色の脚、枯れ草に似せた身体の色と模様。鳴き声はキュツ、キュツ、キュツ。

053 ツル目クイナ科 ヒクイナ



撮影 久留野 明

L-23Cm

枯れ葦の上に現れたヒクイナ。生活のほとんどが葦原の中です。とても稀な野鳥で警戒心が強く、滅多に姿を現わさない。鳴き声はキョツ、キョツ、を繰り返します。赤い脚は大きく赤褐色の身体の美しいクイナです。

054 ツル目クイナ科 パン



L-32Cm

赤い顔のクイナ、黒褐色に白い線が体横斜めに走ります。赤いくちばしの先が黄色く、泳ぎは進んでは止まりそうになりまた進みを繰り返しています。最初に生まれた雛が次の雛の子育てを手伝うことが知られています。逃げる時は羽ばたきながら水面を大きな脚で走ります。

055 ツル目クイナ科 オオバン



L-390cm

淀川では単独もしくは番の留鳥。白い額にクリーム色のくちばし。

バンは尾羽を立てて泳ぎますが、オオバンのお尻は丸い感じですが、大きめの脚は泥地でも歩けます。

琵琶湖水鳥公園では冬季にコハクチョウのために餌が与えられていて、他の野鳥も集まって来ていて、オオバン500羽ほどが群れて越冬していました。

056 チドリ目チドリ科 タゲリ

写真応募中

タゲリとの出会いは真冬の琵琶湖の湖北町。1987年でした。頭から伸びる冠羽とグリーン基調の金属光沢。忘れられない印象が残っています。その野鳥が柴島浄水場の敷地内で越冬していることを知り、柴島再生干潟に現れることを切望しています。他の越冬地では稲の切り株をつついていることが多いようです。

L-320cm

057 チドリ目チドリ科 ケリ



眼が赤く、飛ぶと白黒のはっきりした模様が目立ちます。

留鳥、春から6月にかけて早口でケリケリケリと、騒がしく鳴くので声を覚えれば観察はしやすいと思います。

柴島浄水場では、毎年繁殖が確認されています。もちろん浄水場ですので、立ち入りは禁止されています。隣接の水道記念館の敷地内から観察することはできます。

とにかくトビ、カラスなど天敵にはしつこく声を張り上げて追回し寄せ付けません。

L-360cm

058 チドリ目チドリ科 ムナグロ



L-240cm

キュビートと鳴く旅鳥、群で行動するそうですが、十三干潟では一羽だけのことが多いようです。
毎年、春の渡り時期に観察されていますが、秋の渡り時期が、8月半ばに始まっていて驚きました。
少し大きなダイゼンとの違いは、やや細身に見えることと、背や翼の色に金色が混じっていること。
英語名がパシフィックゴールデンプロパー。

059 チドリ目チドリ科 ダイゼン



L-290cm

毎年、春の渡り時期に観察されています。
たいていは、一羽もしくは2羽で干潟に現れ、オオソリハシシギなど、他のシギ類にまぎれて、ゴカイなどの餌を食べます。
ムナグロは淡水域に多く、ダイゼンは海水域に多いとされています。
ところでダイゼンの名前の由来について、大膳料理とは皇帝に出す料理のこと。よほど美味しいらしく、朝鮮半島や中国本土を北上する際に捕らえられるため、日本を通過していると言う野鳥専門家のお話を聞いたことがあります。
到着した当初はスマートでムナグロと見間違えるほどですが、すぐに丸々としてきて身体の模様も変わってきます。

060 チドリ目チドリ科 イカルチドリ



L-210cm

コチドリよりやや大きな留鳥。遠目では区別できません。
本来は河川の上流や中流域が主な生息地。したがって淡水域がお好みの場所のはず。そんなイカルチドリが榮鳥再生干潟にて観察されています。
冬に見るつながった蝶ネクタイのチドリはこの鳥がほとんど。
コチドリのほうが眼が大きく感じます。

061 チドリ目チドリ科 コチドリ



L-16Cm

干潟を千鳥歩きします。急に走り出したり急停止したり、右へ行こうとして左へ飛びついたり。餌を捕るため様々な仕種を観察できる夏鳥です。

眼に黄色いリングがあり、首の黒帯がつながっていることもコチドリの特徴です。ビビュービビューと鳴きながら片脚を震わせてプロポーズします。

飛立つ直前に翼を思い切り上に伸ばします。



062 チドリ目チドリ科 シロチドリ



L-17Cm

秋に家族らしい群で干潟を訪れます。年間を通し観察されていますが、真夏にはあまり見かけなくなります。写真は梅雨の大雨の日、子育て中のシロチドリが心配になり観察に出かけたところ、お母さんのふとこで寒さを防ぐ様。お母さんの愛情たっぷりの子育てぶりに感心させられました。

063 チドリ目チドリ科 メダイチドリ



L-19Cm

毎年、春の渡り時期に観察されています。ブリュッと鳴きます。餌はほとんどがゴカイを引き出して食べています。近年観察数が増えているようです。かつては、一羽だけの観察例が多かったのですが雄雌のペアで観察されることも増えています。

064 チドリ目チドリ科 オオメダイチドリ



撮影 小松弘明

L-24Cm

2008年5月柴島再生干潟で小松弘明さんが観察、撮影しました。
モンゴルやヒマラヤ山脈の北側あたりで繁殖主にエジプト東岸からオーストラリアにかけての広い範囲の沿岸部で越冬します。日本は渡りのコースから外れているため稀にしか観察されていません
メダイチドリよりも大きく、メダイチドリにある喉の白い羽毛を縁取る黒線が無いところが識別点です。

065 チドリ目 ツバメチドリ科 ツバメチドリ



L-23Cm

2004年5月、十三干潟に現れました。ツバメに似たシルエット、灰褐色の身体。飛びながら餌を取ったりと行動もツバメに似たところがあります。
繁殖地は日本も含まれていますが非常に局地的です。
ユニークな目立つ顔立ちをしています。腹と腰の白い6羽の群が干潟に下りました。
写真は干潟から飛立ったシギの混群に紛れて飛翔するツバメチドリです。

066 チドリ目シギ科 オグロシギ



撮影 小松弘明

L-38Cm

柴島再生干潟に現れたオグロシギです。春の渡り時期です。オオソリハシシギのくちばしを真直ぐにしたような容姿ですが、飛翔する時は尾の先が黒く、尾の付け根が白く、翼も白い風切羽根の先が黒く、白黒の美しい模様が現れます。
餌を漁る時に背中羽根を逆立てることが多いのもオグロシギの見分け方です。

067 チドリ目シギ科 オオソリハシシギ



L-39Cm

068 チドリ目シギ科 チュウシャクシギ



L-42Cm

069 チドリ目シギ科 ダイシャクシギ



L-58Cm

十三干潟に現れた家族らしいオオソリハシシギの小さな群。ユリカモメの頭が黒くなりきる頃、4月末の日曜日。泥の中からゴカイを引きずり出すと水洗いしてドロを落として食べていました。

ほんの少し上に反った長いくちばしの特徴。

二羽でじゃれ合うチュウシャクシギ。西中島地区の葦原の中に水路があり、金属製の杭があります。30羽を超える群が水路に舞い降りたこともあります。一羽が杭の上で外敵の見張りをしていたところ、見張りを交代しようとして雄らしい一羽がやってきた瞬間です。餌の90%がカニです。カニ穴にくちばしを差し込んでカニを引きずり出して脚もはがし甲羅だけにしてから丸呑みします。カニ穴に合わせてくちばしが下に湾曲しているのでしょうか。たまにゴカイも食べています。

2000年5月 ダイシャクシギが十三干潟でカニを捕らえていました。この日は、ホウロクシギも現れて、大型のシギが交互に干潟に出現したので、びっくりしました。飛ぶと背中が白いのでホウロクシギとの違いがよく分かります。

膝から下を水に浸け、くちばしを水中に入れてほとんど外す事無くカニを引きずりできていました。

070 チドリ目シギ科 ホウロクシギ



L-63Cm

日本最大のシギ。長いくちばしを使いカニを見事に捕らえ、くちばしを強く振って脚や爪を一気に弾き飛ばして、甲羅を丸呑みします。周りにはユリカモメが集まり、爪や脚を奪い合います。まるで軍艦と追隨する船舶のようです。1997年、2001年、2005年に観察記録があります。とにかく大きく、くちばしにカニを捕らえるための、カニに反応する感覚器官があるのでしょうか、百発百中で泥の中からカニを引き出していました。

071 チドリ目シギ科 ツルシギ

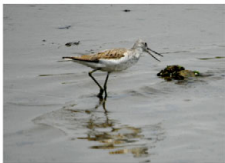


撮影 藤波不二雄

L-30Cm

全身が黒く見えるシギ。くちばしと脚はオレンジかかっています。ビユイ、チョイと鳴いて飛立ちます。淀川では稀な旅鳥ですが、秋の渡りでは十数羽の群で田んぼや蓮池によく現れています。

072 チドリ目シギ科 アオアシシギ



L-32Cm

2008年5月まで、アオアシシギが積極的に動いて餌を漁る姿を知りませんでした。いつもキアシシギの群に紛れて、ひっそりと餌を捕っているものと考えていたのですが、柴島再生干潟で見たアオアシシギのペアは、くちばしを半開きにして水中に入れて左右に振りながら前進して餌を捕るとくちばしを上にして餌を飲み込んでいました。ヘラサギやクロツラヘラサギの採餌にとても似ていました。毎年春に観察されていますが、秋の観察例もあります。



073 チドリ目シギ科 イソシギ



L-20Cm

チーリーリーと鳴きながら飛翔して尾をしきりに振りながら餌を捕っています。河口からかなり上流まで、水辺でよく見かけています。

074 チドリ目シギ科 クサシギ



L-22Cm

淀川下流域では滅多に観察できません。春の渡り時期に2002年に観察されたのみです。単独で現れひっそりと隠れるようにしているため観察されにくいのでしょうか。

本来は淡水域の田んぼや沼が中継地です。伊丹市の昆陽池では何度も観察してきました。冬に観察したこともあります。

鳴き声はキュイキュイキュイ。

075 チドリ目シギ科 タカブシギ



L-22Cm

鷹の羽を持つシギ。しかし淡水域が生活圏。そのため汽水域では滅多に観察されていません。渡りも8月に始まるようで、ツバメのねぐら観察でたまに出会っています。

鳴き声はピッピビビビ、……

それにしても、シギ類の観察は種類と、似ている仲間との識別が難しい。

076 チドリ目シギ科 キアシシギ

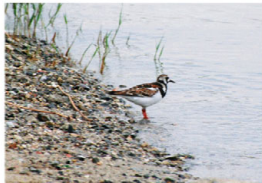


L-25Cm

幾つもの3-5羽の家族らしい群で春の干潟を訪れる最も一般的なシギ。黄色い脚はやや短め。ビュウーイとよく鳴くので観察しやすいシギです。干潟が現れるまでは流木や岩などに寄り添って止まります。

夜明けの光の中干潟へ飛来してきました。

077 チドリ目シギ科 キョウジョシギ



撮影 久留野 明

L-22Cm

京都のあでやかな女性の衣装を思わせる旅鳥。甲子園浜などでは、春の渡りシーズンによく見られるのですが、淀川ではあまり見かけません。10年ぶりに十三干潟に姿を見せ、熱心な撮影者から提供を受けました。英名はTurn stone。石をひっくり返して小さなカニ等を食べています。

078 チドリ目シギ科 アカエリヒレアシギ



撮影 藤波不二雄 L-19Cm

明石海峡大橋の近辺に春、大きな群で押し寄せる、プランクトンなどを食べている小型のシギ。

2001年早春、十三干潟周辺に現れています。冬羽は白黒に灰色で、春には眼の後ろから首にかけて赤褐色の模様が浮かび上がります。

くちばしは細く真直ぐで黒い。

079 チドリ目シギ科 ヤマシギ

写真応募中

野鳥観察者よりも釣り人が良く見かけるそうです。釣り場への途中、足元から不意に飛立つそうです。

先細りの真直ぐなくちばしはタシギなどよりも短め。

夜行性で昼間はほとんど動かずに眠っています。